

人間の認識と言語表現

— 日本語表現「片田舎」を中心に —

李 潤 玉

Summary

This paper is intended firstly, to show my field - work research on the historical relationship between the old Korea, especially 'Kudara' and the old Japan, which was called "wa (koku)" by the Kudara people, and secondly, to make a conceptual analysis of my tough - customer Japanese expression "kata - inaka" in terms of cognitive linguistics. This expression, though a little old-fashioned nowadays, lingered on in my mind, sometimes quietly and sometimes loudly, and this is why I have picked it up to reveal what it really is.

〈はじめに〉

この小論のテーマは日本語表現「^{かた い なか}片田舎」の認知言語学 (cognitive linguistics) 的理論を基盤にした分析である。ここでいう「認知言語学」はジョージ・レイコフ (George Lakoff)、マーク・ジョンソン (Mark Johnson)、ロナルド・ラネカー (Ronald Langacker)、ジル・フォコニエ (Gilles Fauconnier)、イヴ・スウィツァ (Eve Sweetser)、フリードリッヒ・ウンゲラ (Friedrich Ungerer)、ハンス-ヨルグ・シュミッド (Hans - Jorg Schmid) 等、それぞれ幾分違いを持った認知言語学者達のどれを主要理論としたかというより、所謂「認知科学 (Cognitive Science)」の一分野としての認知言語学の理論である。人間の「認識 (cognition)」は人間の「知識 (knowledge)」に深く関係する脳の精神作用によって言葉の意味体系を構築していくのが「認知意味論 (cognitive semantics)」と考えられることから、ここで言う「認知言語学」を「認知意味論」と言い換えてもよい。

筆者にとっては、この小論の中心に据えた「片田舎」なる日本語表現は何となく理解できるようでありながら、定義をするとすると二の足を踏む表現であり続けて

きた。おそらく、その原因・理由は筆者の母語である韓国語に同様の意味を持つ表現が存在しないこと、参照した数冊の日本国語辞典の記載が思いの外、各々異なっていたことにあると思われる。少し具体的に言えば、「田舎」の意味は別にして、先頭に位置する「片」が指示する「意味概念」（以下、この表現、又は「概念」を用いる）は何か、を論理立てて分析する。そして、その分析は漢字の《解字》、「全体と部分」というゲシュタルト（Gestalt）的な人間の理解力、「語」が持つ知識の「枠組み（frame：フレーム）」等に、更には異言語の英語、ラテン語における概念研究にも及ぶ。

1.0. テーマ選択の動機

言語変化のフィールドワークは常に有意義である。今日の言語には書物や論文で得られる情報よりも速いスピードで変化が生じているからである。近年は母国の韓国の各地方を中心に東南アジアでのフィールドワークに重点を置いてきたが、今春は宗旨を変え日本の福岡県（九州）を訪れることにした。その理由は、永年心の中でくすぶっていた朝鮮と日本（正確には、倭（の）国）との密接な国交を示す遺跡をこの目で直接見てみたいという願望を叶えるためであった。それ故、今回は言語ではなく歴史上の確認作業というフィールドワークになったが、フィールドワークには常に思いがけない貴重な副産物があり、今回のそれは本論のテーマである「片田舎」という日本語表現であった。以前に友人やマス・メディアから時々耳にすることはあっても、日常会話表現でないこともあって、何か興味を引くための表現に過ぎなかったものが研究対象になった訳は、遺跡の訪問先の各地で頻繁にその表現を耳にしたこと、及び遺跡の多くが「片田舎」と地方で呼ばれている所に存在していたからである。とまれ、この言語表現の認知言語学的分析は少し後に回し、本来の調査目的であった歴史的遺跡探訪という時の遡及の場に身を置いたことから自ら確認し得られた事柄を記しておきたいと思う。

1.1. 朝鮮と日本とのつながり（その1）— 大野城 [市] —

筆者が先ず訪れたのが大野城跡である。この城跡は特別史跡として水城跡と歴史上深いつながりがあり、このことは次節で述べる。大野城は現在城壁だったと覚

しき四角い石積みが土手のように残るばかりだが、「この石積み方法は百済時代の土地や今日の済洲島ジェジュに残る石垣のそれと同一と考えられる」(NHK アーカイブス)ことから百済と倭国の軍事上の繋がりが見られるという。

この城跡に立つと、時計が昔の時代まで逆回転し、はるか昔の祖国に思いを馳せる崇高な気持ちにさせるのも、知と情の二つの働きを兼ね備えた大脳を持つ人間特有の天与の質が生み出してくれる瞬間と実感する。

1.2. 朝鮮と日本とのつながり (その2) — 水城みずき —

「水城」は小川を越えた所からの丘陵斜面に残る石垣である。その歴史に触れた事典からの記載を引用する。

みずき【水城】

大宰府⁽¹⁾の防衛施設。古代に築かれた土塁で、現在は長さ約1.2 km、高さ約13 m⁽²⁾。戦時には御笠川みかさをせき止めて水を貯めたのがその名の由来とされる。664年築造、765年には改修があったらしい。遺構(特別史跡)は福岡県太宰府市と大野城おおのじょう市の境界付近一帯に残る。

——『百科事典マイペディア』

前述した、当時の朝鮮国百済の城壁技法を思わせる石積み土塁は急な斜面の丘陵地の麓から斜面に沿った斜め状のものである。土塁の土台石から5 m程の急斜面の草むらは、土塁と並行した水流に変わる。上記引用中の御笠川の跡だと思えるが、日本語の「川」からイメージできるようなもの(例えば、淀川・鴨川・隅田川)ではなく、アメリカ英語のCreekがぴったりの幅2 m程の水流である。当時の川幅は知る由もないが、引用通り「せき止めて水をためた」堀(moat)作りの水源に使われただけの規模であったであろうことは推測できる。緑々とした現地の草むらに立ち往時を偲ぶ気分に入るだけで、実戦は行われることはなかったにせよ、「夏草や兵どもが夢の跡」(芭蕉『奥の細道』)を思い出させるのは、どんな城跡や戦場跡でも同じで、いつの時代でも何故人間は尊い命の奪い合いをしなければ気が済まないのか、と悲しい気持ちになるのは筆者だけではないだろう。‘History repeats

itself(歴史は繰り返す)と諺でいうが、或る意味、人類の歴史とは戦争の歴史ではないかとさえ思いたくもなり、以下 1.3.2. の(2)の英語の諸表現を思い出すと、弥が上にも連想が生々しくなる。

1.3. 朝鮮と日本のつながり (その3) 一 百濟と倭一

1.3.1. 朝鮮半島の歴史と諸表現

一般によく知られているように朝鮮国と日本国との国交の始まりは古い。とはいえ、朝鮮半島及びその付属島から成る地域に初めて建国といえる建国がなされたのは紀元前からではない。紀元前5世紀頃に箕子朝鮮、同2世紀初めに衛氏朝鮮が建国したが、同108年に漢の武帝が滅ぼし、楽浪など四郡を設置、半島南部には馬韓・辰韓・弁韓が分立した。紀元4世紀に高句麗・新羅・百濟・任那が対立抗争を始めたが、7世紀に新羅が統一国家を建設、10~14世紀は高麗に、14世紀以降は李氏朝鮮にと王朝が入れ替わった。言語面から見れば「朝鮮国」の英語名 Korea (n) は「高麗」の発音のローマ字アルファベット化したものとの通説に従って、国家としての朝鮮の始まりは高麗と見なすことも出来る。高麗の大祖王権(在位918~43年)が935年に新羅を滅ぼし翌年朝鮮半島を統一した(『デジタル大辞泉』、「おうけん」参照)ことから国名に使われたが、668年に唐・新羅連合軍に滅亡させられた高句麗(又は、高句麗)が「高麗とも呼ばれた歴史的事実から見ても言語人類学上繋がりがあがる(なお、「句」と「勾」の関係は、後者の「勾」は前者の「句」が崩れた字体で同一概念語(「口型やㄣ型のかぎをかみ合わせたさま」+「口(あな)」)(『漢字源』参照)である。Korean(朝鮮語)はハングルという特有の文字を使う。以下(1)に両者の英語化された歴史を記しておく。

- (1) **Korean** n. 朝鮮. *Korean Koryo* (*korai* (高麗)) 「高い山やきらめく川の国」…◇19世紀末までは *Corean* と綴られた。

Hangul, - kul, h - n. 《1951》ハングル 《朝鮮文字; onmun ともいう》.

◆ *Korean Hangul*, - kul / *Han Korea +kul* script, alphabet.

—— 寺澤 (1997) (省略筆者)

従って、よく耳にする「ハングル文字」はいわゆる重複表現 (tautology) で、言語学的には正確ではない。

1.3.2. 史跡訪問による言語表現の連想

大野城、水城両史跡訪問での歴史的探求では様々な感慨を抱いたが、同時に連想による言語表現の確認と発見があった。以下にその一部を示す (注：初二例は野球の bat と共通語源)。

- (2) **battle** n. ... ◆ ME batail (le)... ∠ L battuere 'to BATERE'.
batter v. 《c 1330》 続けざまに叩く, 乱打する. ◆ *bat* (e) *re* (n) ...∠ L battuere 'to strike'
*war*¹ 《a 1122 *Peterb. Chron.* an. 1116》 戦争. ... ∠ IE* *wers* - to confuse
 —— 寺澤 (1997) (省略筆者)

一つひとつの具体的な実戦闘 *battle* が「相手を複数回叩く」概念語であるだけに生々しく感じられ、*battle* の集合体全体を示す *war* が「混乱」概念を表すことは語の歴史からもわかる。このようなことを知った上で事典を見ると案外と意外な発見がある。このことを(3)に記す。

- (3) **battle** n. ... ◇ [OE] ... *camp* ...
*war*¹ n. ... ⇨ WORSE.
*war*² adj., adv. ... 《スコット》 = worse.
worse adj., 《OE》 BAD (LY), ILL の比較級 ... ∠ IE
 * *wers* - to confuse, mix up ... —— 寺澤 (1997) (省略筆者)

(2)、(3)が教えてくれることは以下(4)のよういくつかある。

- a. *war* と *worse* の原義概念は同一で「混乱」を表わす。
- b. *war* の指示物は、*battle* の指示物が「具象的事象」であるのに対し、抽象物である。

(例：This means *war!* これでは戦争をやるしかない『ジーニアス英和大事典』。ただし、修飾句付着による特定化 (specific) は具象性を帯びる (例：a cold war)。

- c. *camp* は戦争・戦闘と近接関係語 (「軍隊のキャンプ地」) であることから次のような日常会話に出現する。

“So we’re *in the opposite camps*, Marshal.”

(そうすると保安官、あんたとオレは敵対関係にあるということだな。)

—— *My Darling Clementine* (米. 1946 年) (イタリック体筆者) (和訳筆者)

因みに、現在の大阪市中央区を南流する東横堀川^{ひがしよこぼり}に架かる橋を高麗橋と呼ぶが、東横堀川が 1594 年豊臣秀吉の惣講建設に伴って開削されたとされ (『百科事典マイペディア』、「こうらいばし」参照。) ることから、この日本の川名は朝鮮半島に由来すると推察できる。

百済国と日本国との国交歴史の始まりは古く 4 世紀に遡る。もっとも、当時の日本には大和 (やまと; 現在の奈良県) を中心とする畿内政治勢力の連合体が存在し、従来「大和朝廷」と言ったものの統一国家の政府を意味する朝廷の成立はなかったと考えられることから、近年では「大和政権」、「大和王権」などの呼び方をされており (但し、「ヤマト」を「大和」と表記されるのは奈良時代以降) (『百科事典マイペディア』参照)。当時の日本は中国二十四史の一つ『漢書』から『隋書』までは「倭」、「倭国」と訳されている。従って、上出 4 世紀は百済と倭との交流であり、事典、辞書によれば国交は 6 世紀の百済と大和朝廷との間で始まったと捉えるのが歴史的に正しいとなっている (『百科事典マイペディア』、『デジタル大辞泉』、『明鏡国語辞典』など参照)。

1.3.3. 百済が日本に残した言語・文化の一面

福岡でのフィールドワークでは、現在に史跡の場に立つことにより歴史を体感するという貴重な経験をしたが、朝鮮古代国の一つである百済について自分自身でも意外な程もっと知っておきたい気になった。調べてみると確かに日本との交流のうかがわせる事実が多い。以下では、先ず百済について簡単な纏めを辞書引用を用

いて行い、次に筆者の調査結果の代表的なものを(4)として記す。

(4) くだら【百濟】

古代朝鮮三国の一つ。建国当初（4世紀頃）より日本（正確には「倭（国）」、のち「大和朝廷」とは友好関係を保ち、仏教・儒教その他の大陸文化を伝える。5世紀後半には日本の生産物をふやし産業・文化を盛んにするための専門家集団「殖産人」^{しよくさんじん}（時に、「渡来人」^{とらいじん}とも言う）、（文字書き、大工、僧侶、武器製作者、機織り人、農業者等）が渡来した。新羅・唐連合軍によって滅亡（660年）する前後にも多くの渡来人があった。ひやくさい。はくさい。

——『広辞苑』、『デジタル大辞泉』（下線筆者）

他国に移住する人たちが故国を偲んで新天地で名付けを行う心情は、洋の東西を問わず共通しているようである。故国を懐かしむ思い、故国と同じような風景の土地、出身地が同じグループが出身地名を残そうとする心境等、理由は色々考えられる。特に移住先が未開地であれば名付けの最も簡単な方法は故国に存在する名を流用することである。この典型的な例はアメリカ合衆国で、ロンドン（London）、パリ（Paris）、ベルリン（Berlin）、などは元よりケインブリッジ（Cambridge）、オックスフォード（Oxford）、エセックス（Essex）等、限りがない。カナダも同様で、ロンドンの一部のオンタリオ州（the Province of Ontario）、南部にはウィンザー（Windsor）に加えてエイヴォン（Avon）川が流れ、ストラットフォード（Stratford）なる町があり、否が応でもイギリスのシェイクスピア（Shakespeare）の出身地を想起させる。又、オンタリオ自体もアメリカ合衆国カリフォルニア州ロス・アンジェルス（Los Angeles）の西郊外の町名でもあり、ややこしいことこの上ない。殖民時代にオランダ先住者達が住んでいたニュー・アムステルダム（New Amsterdam）を奪ったイギリスのヨークシャー（Yorkshire）出身者達は1664年ニュー・ヨーク（New York）と新名称をつけたのも出身地固執の現れである⁽³⁾。

本題に戻る。百濟からの渡来人達は「百濟」という国名を日本に残しているが、

その地域は現在の近畿地方と九州に限られるようである。そのいくつかを以下(5)に示す。(c②、dを除き、a～fは『百科事典マイペディア』より)。

(5) a. ^{くだらおおでら}百済大寺

南都七大寺の一つで、奈良市大安寺町にある高野山真言宗の別格本山の^{だいあんじ}大安寺が嘗て十市郡に移されていた時の古称。

b. ^{くだらかわ}百済川

奈良盆地中部を流れる^{そががわ}曾我川の古称。

c. ^{くだら}百済

- ①現在の大阪市生野区鶴橋付近
- ②現在の奈良県北葛城郡広陵町の一地区

(注：現在の福岡県福岡市博多区付近に「^{ももち}百道」なる一地区あり。「百済」とのがりは未調査。)

d. ^{ひやくさい}百済

前出(4)の下線部通り「ひやくさい」と読み、現在の福岡県福岡市博多区付近の一地区の居住者の姓として使っていることを筆者自身確認。

e. ^{ひやくさいじ}百済寺

滋賀県^{あいとうし}愛東市(現在の^{ひがしおうみし}東近江市)にある天台宗の寺。

地名、姓以外に百済から或る文化財がもたらされている。この件について次の(f)の引用を見てみよう。

f. ぜんこうじ【善光寺】

長野市元善町にある単立の寺。…欽明天皇の時に百済の聖明王が献じた阿弥陀三尊仏(本尊、重要文化財)を、602年難波から^{なにわ}信濃に移して開創。…

——『百科事典マイペディア』(省略筆者)

実際、韓国人のツアー・バスが善光寺に向う話を筆者は以前から耳にしていたが、

今回の福岡県探訪の副産物のような、このfの表記に出会い、納得がいった。

2.1. 日本語表現「片田舎」の認知言語学的意味概念分析

上述してきた九州福岡市探訪を通して「片田舎」という表現を幾度か耳にした。これも上述したことだが、以前に何度か耳にしていながら記憶の奥にしまっていた表現で、言語学的分析を怠っていた。大野城市、水城を訪れ、地方の方々にフィールドワークに有益な情報を求めようとする、「わざわざこんな『かたいなか(片田舎)』にまで来られて…」と言われた。急に記憶の奥から現れた表現に戸惑いながらも、今回はこの表現の学問的分析を行うことに決めた。具体的には「片田舎」の意味概念分析であり、分析手法は認知言語学の視点となる。

2.1.1. 辞書記載における「片田舎」の解説内容の確認

「片田舎」は語形形成的には「『片』 + 『田舎』」であることは間違いないが、「片」の概念分析に入る前に「田舎」の辞書記載の確認から始めることにする。「田舎」なんて誰でも理解していると言われそうだが、辞書記載には意外な落とし穴が潜んでいるからである。実例を一つ挙げてみると、日本語の母語話者に「岩」と「石」の指示物の違いを尋ねてみると「落とし穴」の意味することが見えてくるだろうが、その前に「岩」と「石」の辞書記載（『広辞苑』）を次の(6)に引用する。

(6) いわ【岩】

石の大きなもの。岩石。…

いし【石】

岩石の小片。岩よりも小さく、砂よりも大きなもの。

論理的には、この記載は矛盾だらけである。それらの矛盾を(ア)として記す。

- (ア) 「岩」とは何かを規定する基準に「石の大きなもの」（一重下線）とし、「石」とは何かを定義するのに「岩よりも小さく、砂よりも大きなもの」としている。つまり、「岩は石の大きなもの」で、「石は岩の小さなもの」ということである。この定義方法は「『落馬』とは『馬から落ちること』である」、「『馬から落ちること』とは『落馬すること』」であるという、二つのモノの定義

に互いに相手を使って定義しようとする、所謂「循環論的定義」で、いつまで経っても同じところをグルグル回りする終りなき定義方法である。

- (イ) 「岩」の定義に「岩石」と「岩」を使っている。この定義は、「『山』とは何のこと？」と尋ねられて「『山』のこと」と相手の言った通りに言い返す「オウム返し」式返事や「『木霊』型返事」と実質的には同じことで、質問・疑問という旧情報に何の新情報も与えていない。

しかしながら、辞書記載は矛盾だらけで何の役にも立たないと、筆者は言おうとしているのではない。筆者が言いたいのは「辞書とはこのようなもの」ということである。別な言い方をすると、国語辞典は日本語母語話者のために編纂されたものであるということ、更に別な言い方をすれば、日本語母語話者が日本語を話し、聞きとる能力を発揮する年齢になる頃には、「岩」、「石」がどんなモノかを日々の生活体験を通して得た知識として、大脳内の記憶を司る部位に定着させて既に知っているからこそ、上記(6)のような記載で何の不便もないのである。これらの事を前提として本論の辞書記載に移る。

2.1.2. 日本語表現「田舎」の辞書記載と意味概念

ここでは「田舎」の意味概念を明らかにする。認知言語学的手法を用いてその試みを示すが、その前に2.1.1.で述べた辞書記載の正体を示し、その後に意味概念分析に入る。先ずここでは「田舎」の記載がどのようなものかを二冊の辞書から引用する。以下(7)、(8)がその実例である。

(7) いなか【《田舎》】

【名】

- ①都会から離れた、家が少なく田畑・山林の多い所。ひな。また、大都会から離れた地方。「-から上京する」「緑豊かな-の生活」
- ②郷里を離れて大都会で生活する人の生まれ故郷。出身地。「夏休みには-に帰る」「-の母から便りがあった」
- ③便利・洗練・多様性など、都会的要素が欠けていること。「-なので見る

べきものがありません」

- ④《他の語について》素朴・粗野・野暮などの意を表す。「-風」^{ふう}「-料理・
-侍^{ざむらい}・-芝居」

◆「田井中^{た い なか} (= たんぼの中)」の転という。(『明鏡国語辞典』)

(8) いなか【田舎】

- ①都会から離れた土地。^{ざいごう}在郷。ひな。地方。
②郷里。故郷。
③「いなかじるこ」の略。
④「卑しい」または「粗暴な」の意を表す語(『広辞苑』)

上出(7)、(8)は「他表現を用いて『田舎』は何を意味するか」を説明しようとしたもので、使用されている表現をさらに明確にしようとする試みは結局は以下(9)の結果に終わってしまう。

- (9) ・「都会」①人口が集中し、商工業や文化活動の中心となっている繁華な土地。(『明鏡国語辞典』)
・「郷里」①生れ育った土地。ふるさと。
②むろざと。村落。(『デジタル大辞泉』)
・「故郷」(略) 生れた土地。(『広辞苑』)
・「在郷」①都会から隔たった田舎の地方。(以下略)(『広辞苑』)
・「ひな(鄙)」①都を離れた土地。(以下略)(『広辞苑』)
・「地方」①国内の一部の土地。
②首府以外の土地。いなか。
「-へ転勤する」⇔ 中央。(以下略)(『広辞苑』)

要するに、この種の作業は労力と時間を要するだけで、全く無意味とは言わぬまでも、やればやるほど終りなき「循環論」の深みに陥ることになる。駄目押しに、もう一例を次の(10)に挙げておく。

(10) ・さと【里】

- ①(「郷」とも書く) 山中や田園地帯などで、人家が集まって小集落をなしている所。ひなざと。むらざと。村落。「山からーへ下る」
- ②(「郷」とも書く) 都に対して田舎。また、ふるさと。在所。「ーのわらべ」(以下略)(『デジタル大辞泉』)

前出「郷里」の構成要素各々の記載を調べてみると、(10)が示すように「さと」から「『里』イコール『郷』」になる結果が出てくると同時に、「田舎」とは何かを辞書表記を通してみると「(都に対して) 田舎」(=(10)②下線部)が使われ、「『田舎』イコール『田舎』」という図式に辿り着く。前出した「『山』イコール『山』」と同じことがここでも起きている。繰り返すが、母語話者用の辞書の正体はこのようなのなのである。

2.1.2.1. 「田舎」の意味概念

「意味概念」とは語や表現の意味を概念的に捉えたモノを指し、「概念的意味 (conceptual meaning) と言い換えてもいい。ただ、「意味とは何か?」に関しては言語学の歴史においても多種多様な見解があり、その定義を文字を使って正確に示すことがどれ程有意義なことかは多分に疑問であり、又困難なことかはアメリカ構造主義 (American Structuralism) の挫折原因と 1950 年代以降 (変形) 生成文法の Chomsky、格文法の C.J. Fillmore、認知言語学の G. Lakoff 等の研究系譜を一読するだけでも明らかである。俗に言う英和辞典に載っている「意味」は、「意味」ではなく単なる「日本語訳」に過ぎない。本論で「意味」と言う場合、上述した「概念的意味」であることをお断りしておく。人によっては、我々が日常生活を送りながら五感を通して日々大脳に蓄えた知識を基盤に、ある語や表現を聞いたり見たりした時に頭に浮ぶイメージのようなものを「概念的意味」と定義することもあるが、これも筆者が主張することと同種である。日本語に関しては上野編 (2006) が詳しくわかり易いので一例を(11)として引用する。

- (11) ① 20本の { 鉛筆
ビール瓶
ホームラン
?本
?コップ
?カバン }

②上の①で数を数える単位に「本」との自然な結合と不自然な結合との区別は或る年齢に達した日本語母語話者なら問題なく出来る。が、「両者の違いは何?」となると説明出来ないことがある。この現象は脳に蓄えられた知識が「無意識的意識 (unconscious consciousness)」であることに原因する。

③自然な結合には「共通の概念」が存在する (次図参照)。



この3つには「切れ目のない細長い線上のもの」概念が共通して存在する (が、不自然な結合の「本」、「コップ」、「カバン」には存在しない)。

本題の「田舎」の意味概念は何か、に戻る。前出2.1.2.(7)、(8)の辞書記載に見られる共通項は何か。先ず挙げられるのは次の(12)である。

- (12) 都会から離れた土地／所

次に我々が「田舎」という表現を見たり耳にしたりした時、具体的に頭に浮ぶことはどの様なものなのか。筆者の場合は次の(13)である。

- (13) ①家が (都会と異なり) 少ない。(カッコ内筆者)
②田畑が多い。

③山（林）、丘陵、川がある。

この①～③がイメージされる。しかし、母国で「田舎」と呼ばれる他の土地には③の山（林）、丘陵、川が全く存在しない所、又三つのどれかが欠けている所もある。従って、③は筆者にとっては共通項とは考えられない。とすれば(13)の①、②は「田舎」の指示物を構成する共通項になる。ただし、抽象化だが包含性の高い表現を用いるとすれば「自然物が多い」と言ってもよさそうだが、『人工物（田畑）』対『自然物』の二項対立概念を生み、一つの表現の概念表示としては好ましくない。一つ付け加えておくと、①と②は一種の因果関係にあるペアとして捉えなければならない。「家が少ない」ことは、その分、物理的空間（つまり、空き地）が多いということであり、それを田畑にして作物栽培を行うことは人間の知恵として当然のことである。従って、①、②は人間生活において密接な関係にある。⁽⁵⁾ 以上の理由から(14)を「田舎」の意味概念とする。⁽⁶⁾

(14) 「田舎」の意味概念：

- ・家が（都会と異なり）少ない
- ・田畑が多い

2.1.2.2. 「片」の意味概念

このセクションでは、①「片」の辞書記載、②「片」の英語、フランス語における相当概念語・表現の2つを扱う。更に、その成果を用いて3.1.で「片田舎」の意味概念を提示し、この小論をしめくくる。

2.1.2.2.1. 漢字「片」の辞書記載

ここでは「片」の辞書記載を3例引用する。以下(15)参照。

(15) (イ) かた【片】

- ①揃えば対（つい）となるもの。一方。「-手」
- ②整わないこと。不完全。「-こと」

③わずか。「-時の間(ま)」

④一方に偏し、中心部から離れていること。「-端」「-よる」

⇒ 價 -が付く

解 物事が処理される。始末がつく。

——『広辞苑』(省略・記載筆者)

(ロ) かた【片】

一 《名》一対のもの、二つで一組のもの的一方。

片方。片一方。「-や横綱、-や平幕の対戦」

二 [語素]⁽⁷⁾ 名詞または動詞の上に付いて、複合語をつくる。

① 一対となるもの的一方、一方だけ、の意を表す。

「-親」「-面」「-い」

② 不完全な、整っていない、の意を表す。「-言(こと)」「-仮名」

③ かたよる、一方に偏した、の意を表す。「-田舎」「-意地」

④ わずかな、少ない、の意を表す。「-時(とき)」「-手間」

⑤ しきりに、ひたすら、の意を表す。

「鶯は今は鳴かむと — 待てば霞たなびき月は経につつ」

——『デジタル大辞泉』(注、筆者)

(ハ) かた【片】

一 《名》

① 二つのうちの一つ。-方。「-や江戸、-や上方」

② 物事の仕末。「-がつく(=決着がつく)」「-をつける(=決着をつける)」表記 ②は「方」とも。

二 (造)

① 一対のもの的一方。「-目、-手、-えくぼ」

② (中心から離れて) 一方にかたよっている。

「-いなか・-意地・-思い・-恋・-貿易」

③ 完全でない。また、わずか。少ない。

「-言・-時・-手間」

——『明鏡国語辞典』

2.1.2.2.2. 漢字「片」の概念分析

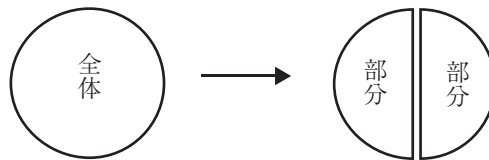
〈分析Ⅰ：日本語の視点から〉

(イ)、(ロ)、(ハ)の記載から要点をまとめると次の(16)になる。

- (16) ①一つとしての全体を部分に分割した各部分（2つで元の一つとしての全体になる「片手」、「片面」等はプロトタイプの例で、極端な場合は以下の表現を用いる）。

へんぺん【片片】 ①きれぎれなさま。 ②断片… ——『広辞苑』

この表記で重要な概念は「断片」概念で、プロトタイプの「2」概念が「多数」概念になっただけにしか過ぎない。上記で述べたことを概念図(Ⅰ)として示す。



<概念図Ⅰ>

この概念図を見て「部分が2つ」と考えずに、「一つという全体」の「分割」概念を表す概念図として捉えなければならない。上出『広辞苑』の記載を参考にして言い換えると、「一つという全体」が「分割」現象によって「断片」の集まりに形状を変えることである。これが漢字「片」が表す意味概念の正体である。

②「不完全な」「整っていない」「完全でない」等の表記は(イ)の概念から論理的に生み出される結果で、「元々是一个という全体」が分割現象を経た結果として「断片」が複数個存在する状態は、当然のことながら「元的一个という全体」と比較すると「バラバラ」「不完全」「整っていない」状態と我々の大脳は認識する。

③「わずか」「少ない」も②と同様の概念化の結果状態を示す表現で、「断片が多ければ多い」ほど「元的一个という全体の大きさ」を再現させようとするれば、断片の一つひとつは「わずかな／少ない」数である。

④ 「(中心から離れて) 一方にかたよる」は「断片」の1個に中心的役割を与えた場合、残りの「断片」の中には物理的に隔たった「断片」が存在することをイメージすればよい。なお、この捉え方は「片田舎」の概念分析で再登場する。

⑤ ⑤のみ「しきりに」「ひたすら」の記載がある。これは「断片のつなぎ合わせ」から得られる概念であるに過ぎない。

このような概念的捉え方をすると、上出(イ)、(ロ)、(ハ)で一見矛盾に見える記載の正体が見えてくる。その一見矛盾の表記を(17)に示す。

(17) 「不完全」「整っていない」 ← 一見矛盾 → 「物事の始末／処理」

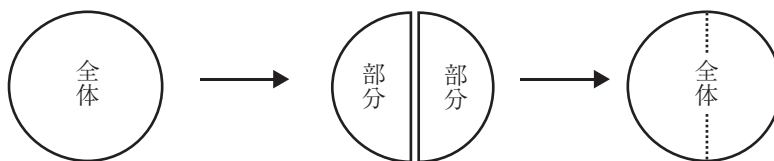
この解決法として次の(a)、(b)を挙げる。

(a) ギャング団が仲間割れした。

(b) ギャング団の仲間割れが片付くのは時間の問題だ。

「(ギャング団なる) 一つという全体」が「分裂した」後、再び「くっ付く」事象を(a)、(b)は表している。この事象変化を概念図で表すと次の(18)となる。

(18) 一団が存在する → (分割現象) → 一団が片片化する → 片片がくっ付く



<「片が付く」の概念図>

結局のところ、複数個に分割存在していた「片」部分どうしが「くっ付く」ことにより「元の一つという全体」に戻ることになる。従って、辞書記載の「片」が一見矛盾に見えるのは「片」という一語のみ見るからであり、「物事の処理／始末」は「片が付く」と表して初めて生れる概念なのである。⁽⁹⁾

〈分析Ⅱ：英語、ラテン語の視点から〉

英語に repair という語があり、語形成 (word formation) 的には「re+pair」である。辞書での主な和訳は「～を修理する／～を修繕する」となっている。実はこの repair は上述した漢字「片」と概念的重なりを持っている語なのである。次の(19)を提示する。

(19) repair < re - +pair

・「re (元の場所に) + pair (一対)」∠複数個の「片」概念表示物を元の場所に戻して一対 (元の一つという全体) にする。

・repair¹ v. 《? a 1350》修復する；(原状に) 復帰させる ...

◆ ME *repare* (n) □ (OF *réparer* // L *reparāre* ∠ re - back + *parāre*
to make ready ——— 寺澤 (1997) (省略筆者)

この(19)から得られる情報は、*repair* を使用する前提 (presupposition) には「片片」概念状態が存在していなければならない事、及び更にその前に「片片」が形成していた「一つの纏りという全体」が存在していた、という事である。次に取り上げるべき事はラテン語 *parāre* の概念分析である。(19)では 'to make ready'(用意する、準備を整える) と現代英語でその意味を伝えているが、この表記はあくまで概念的意味を表しているのものであって、現実の発話や文に現れる表現そのものではないことは言うまでもない。この事は、アメリカ構造言語学で頻用された「morpheme (形態素) 対 allomorph (異形態)」の関係に類似する。

2.1.3. ラテン語 *parāre* の言い換え 'to make ready' の意味概念分析

或る語を定義するには他の語 (句) を用いなければ定義を行えない。が、それは「概念的に重なる部分大きい」ものどうしが言い換えの関係を形作る作業であることは既に述べた。この点を心しながら、以下では 'to make ready' の中核語 *ready* の概念的意味の分析を行う。まず、ラテン語 *parāre* がどのような英語単語に借入しているかの実例をいくつか(20)として挙げる。

について述べておかねばならない。

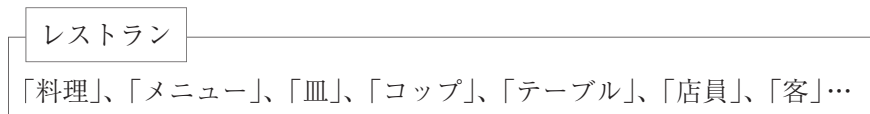
2.1.4. フレーム (frame) を用いた分析

ここでの目的は最終目標である「片田舎」の概念的意味を提示することだが、その提示とこれまでの論旨がどのように繋がるのかを明らかにしなければならない。そのためには「フレーム (frame)」なる我々の認知能力とはどのようなものを述べておかねばならない。以下でその事を簡潔に述べることにする。

2.1.4.1. フレーム (frame) という認知能力

我々人間は、日常生活の中で様々な経験をし、その記憶を大脳の中に蓄えている。そして、ある語を考える時、我々は自身の経験を基に、ある語自体の「意味」だけでなく、その語にまつわる知識をも喚起する。このような、各々の語が持つ知識の枠組みを「フレーム (frame)」という。例えば、「レストラン」という語に遭遇した時、「お金を払って食事をする場所」という辞書定義のような意味だけでなく、「料理」、「メニュー」、「テーブル」、「椅子」、「店員」、「客」等など「レストラン」にまつわる様々なモノも想起されるだろう。これらのモノの意味を理解するために、我々は「レストランのフレーム」という知識の枠組みを利用するのである。このことを図式(22)として以下にまとめる。

- (22) フレーム：言語表現の意味を得る際に、その背景として機能する知識の枠組み



逆の言い方をすると、上図に並べた一つひとつのモノを全部集合させれば、「レストラン」と呼ぶ「一つという全体」が現れる。つまり、「レストラン」という一つの全体を「分割」すれば一つひとつの構成要素が「片片」概念として存在するということになる。「料理」と言っても具体的には多種多様なモノがあり、「メニュー」と言っても色、形状、頁数、示されている料理名の数など様々で、これらを正確の

言葉で定義することなど不可能と言っていい。それ故、我々は日常生活で「料理」、「メニュー」、「皿」と言っても、正しくは「料理というモノ」、「メニューというモノ」、「皿というモノ」と漠然と言っているに過ぎない。従って、このようなモノを概念という用語を使って表しているのである。

2.1.4.2. フレーム (frame) を表す英単語 *gear*

gear はよく「(集合的に) 用具一式」と和訳されていて (例えば『ジーニアス英和大辞典』 *gear* [名] 3a)、用例として ‘*fishing gear*’ (釣具)、‘*traveling gear*’ (旅行用品)、‘*rain gear*’ (雨具) 等が挙げられている。これまで述べてきた「一つの全体」に通ずる概念である。この語の歴史を見ると興味深い記載がある。次の(23)がそれである。

- (23) *gear* n. 1 《? a 1200 Layamon》 武具、服装；衣服。2 《a 1325 *Cursor Mundi*》 道具、器具。

◆ ... (OE *ġearu* ready, *ġearwian* to make ready: cf. YARE) .

—— 寺澤 (1997 : 561) (省略筆者)

因みに ‘cf. YARE’ についても次のような記載がある。

- (24) *yare* adj. 《古・方言》 1 《OE》 準備のできた (以下省略)

◆ OE *ġearu*, *ġear* ready ... ∠ **zarwian* to prepare

—— 寺澤 (1997 : 1585) (省略筆者)

まるで前出の 2.1.3. (20) の *separate*、*apparatus*、*prepare* のラテン語語源かと思わせるほど酷似し、「準備完了 (ready)」概念を共有しあっている。以上の論旨から次の(25)に示す結論を導き出せる。

- (25) ① 「*parāre* (準備完了状態)」概念の前提として「何らかの遂行目的」概念が存在しなければならない。

- ②「準備完了状態」概念は複数の「片」集合概念に通ずる。
- ③「すべての片」集合概念は「一つという全体」概念を形成することと同概念である。

2.2. 日本語「片田舎」の概念的意味

これが本論の最終セクションになる。これまで「田舎」の概念的意味の提示に始まり、「片」の概念的意味について論じてきた。後者の結論として、「片」は「一つという全体を分割した片片」概念を挙げた。残るは、「片田舎」における「全体」とは何か、を認知言語学的視点から述べることのみとなった。が、その前に「片田舎」の記載はどうなっているのかを3例、念のために(26)に挙げておく。

(25) ①かた-いなか【片田舎】

都から遠く離れていて生活に不便なところ。へんぴな田舎。辺鄙地。

『デジタル大辞泉』（下線筆者）

②かたいなか【片田舎】

都会から遠く離れたへんぴな土地。

『明鏡国語辞典』（下線筆者）

③かた-いなか【片田舎】

都会から遠く離れた村里。へんぴな田舎。「-の分校」

『広辞苑』（下線筆者）

三者とも「都会から離れ」という「物理的距離が大きいこと」という概念的共通項を示しているが、論述してきた限りでは「田舎」、「片」の両表現には、そのような概念は無い。この共通項は一体どこから出てくるのか。更には、その共通項表示概念を助長するような表現「へんぴな（辺鄙な）」が共通概念として付随している。「へんぴ（辺鄙）」の辞書記載は以下の(27)の如くである。

(27) 〈辺鄙（へんぴ）〉

- ①都会から離れていて不便なこと。また、そのさま。

『デジタル大辞泉』（下線筆者）

②都会から遠く離れていて不便なこと。『明鏡国語辞典』（下線筆者）

③都から遠く離れて開けていないこと。不便な土地。かたいなか。辺土。

『広辞苑』（下線筆者）

「都（会）から（遠く）離れて」は上出(26)の「片田舎」の記載と重複するが、その事は問題ではない。「^{へん}辺」は「物の中央に対して、物のはじ、はし、へり」（『漢字源』）の概念を表わす語であることから、異なるのは「不便」という表現である。「不便か不便でないか」は絶対的な数量化できる性質のものではなく、相対的なものであるから、記載の内容から見て、「都会と比較して」の事だろう。

さて、「片片」の集合体である「一つという全体」は一体何か、にテーマを移す。結論を先に言えば、「片田舎」における「片」の集合体は「田舎」である。つまり、「片田舎」という分割体の集合が（「都市」に対する意味での）「田舎」という「一つという全体」を形成するということである。このことを次の(28)として記す。

- (28)
- | |
|--|
| <p>(1) 「片田舎」表現は「『片』 + 『田舎』」という語形成を経た表現である。</p> <p>(2) 「田舎」表現の指示物は「片田舎」表現の指示物が集合した「一つという全体」である。</p> |
|--|

この(28)を概念図で表わせれば次の(29)になる。



〈「片田舎」 (= の或る部分) の概念図〉

〈おわりに〉

上の⑲の図はあくまでも概念図である。イメージ図と言い換えても良い。「田舎」と「都市」の対立位置を考えた場合、筆者のイメージでは「都市」は「中央的」と認識していることが理由で図の中央に置いたに過ぎない。

日本語の「『片』 + 名詞句」構造では「片」の指示物は常に名詞句指示物の「片(片)」であることは、「片手」、「片道」、「片屋根」、「片側」、「(悪事の)片棒」、「片思い」、「片時」、「片仮名」等实例を挙げると限りがない(ただし、同文字連ねの「片片^{へんべん}」は別)。筆者が思うに、「田舎」の辞書記載を前出の①家が(都会と異なり)少ない②田畑が多い、の2つにとどめ、「片田舎」は「田舎の分割片」とすれば(もしくは、「分割片」をもっと理解しやすくすれば)辞書記載は認知言語学的には極めて簡素になる。实例にした辞書記載の他の表記は「フレーム (frame)」の問題に帰し、母語話者次第でいくらでも変わり得る。最後に、「片田舎」は自然な表現だが、何故「片都市」が不自然な表現になるのか、は母語話者の「無意識的意識 (unconscious consciousness)」として存在しているはずであるが、如何なものでしょうか。

〈注〉

- (1) 「大宰府」の「大」は、律令制で九州及び壱岐・対馬^{いっき つしま}を管轄し、また、外交・海防までに当った役所を示す場合に使われ、現在の福岡県中西部の市で、古代に大宰府が置かれた地を指す場合には「大」ではなく「太」が用いられる。(『デンタル大辞泉』。「だざい-ふ」、「だざいふ」参照)。なお、『明鏡国語辞典』では見出し語には「だざい-ふ」のみしかないが、「現在の地名には『太宰府』を使うが、歴史的なものには、普通『大宰府』と『大』の字を使う」の注意書きが添えられている。
- (2) 『デジタル大辞泉』では、土塁の規模は「延長約1キロ、高さ約14メートル」と少し数字が異なる。歴史的遺跡の特別史跡の扱いとして異例の感がある。もっとも、『明鏡国語辞典』には「みずき (水城)」は見出し語としてすら記載がないことから、特別史跡と言っても所詮そんなものと思えば、それまでのことである。
- (3) アメリカ合衆国の名付けで例外なのは「州名」である。先住民が付けた既存名を借用

したもの（例、Dakota（〈ダコタ族）、Michigan（〈アルゴンキン族）等）、入植者の母語を使ったもの（例、Texas（〈スペイン人）、Arizona（〈スペイン人）、Carolina（〈イギリス人）、Louisiana（〈フランス人）、Illinois（〈フランス人〈アルゴンキン族）等）で留めておく（寺澤（1997）参照）。

- (4) 概念図とは「現実の細長いものを抽象化したものである。従って、「ホームランのボールの軌跡は真っ直ぐではない」としか考えられなければ、ホームランのボールの軌跡と同じ軌跡を示すように曲げた針金を真っ直ぐに伸ばしてみるとよい。
- (5) 農作物栽培には水は不可欠で川があれば理想的だろうが、川のない所では雨水を溜池に貯水し農業用水としている所もあるので、川の有・無は田舎の必須条件にはならない。筆者が訪れたイギリスのエセックス（Essex）州コルチェスター（Colchester）では、町を一步出た田園地帯の至る所に‘reservoir’（貯水池）が作られている。因みに、その一帯には川は全く無い。
- (6) 辞書記載の他の要素、例えば「郷里」、「出身地」等は都会出身者にとっては無縁のものであるから、意味概念の規定には必須条件ではない。つまり、意味概念の規定は物理的なものを基底に置くため、我々の誰でもが或る場所を訪れて五感で感じ得られる認識可能な要素で「田舎」の意味概念を導き出さねばならない。このことに関する詳細はLakoff & Johnson（1980, 1999）、Lakoff & Turner（1989）、上野（2006）等参照。
- (7) 語素：単語を構成する、意味を持った最小の単位。複合語や派生語の構成要素で、接頭辞・接尾辞いがいのもの。…（『デジタル大辞泉』。アメリカ構造主義言語学（American Structural Linguistics）が言う‘Morpheme’（形態素）に相当する用語と思われる。
- (8) 「点線」は過去に「分割」現象を起こしていたことを示す。
- (9) 「片付く」の他動詞「片付ける」や「彼とは必ず片を付ける」の「片を付ける」も同様の概念化で説明できる。「片を付ける」は「机の上／部屋の中を片付ける」の「片付ける」と同一概念を持っている。具体的には、前者の場合、一つの纏まりを形成していた（仮に2人の）人間が「対立」という分割現象を起し、①お互い歩み寄って元の一つという全体に戻る時と、②一方が他方を追放したり、他方の存在を抹殺状態にすることにより一方のみ存在し、残った一方だけという新しい「一つという全体」を形成することになる。後者の場合も「片片」状態にあるものを全部一個所に集めることに

より「一つという全体」を作る概念化を生むことになる。

(10) 引用中での PREPARE なる大文字表記は同辞典における「見出し語」を意味する。

(11) ME 期の頃は journey (ME 期の綴り: *journei*) は「陸上の長旅」を指した。現代英語 journeyman 「(原義) 長旅を終えた人 → (年季を終えた) 一人前の職人」というメタファー化を含む意味派生にその痕跡をとどめている。

〈参考文献〉

- ・『百科事典マイペディア』(2007). 日立システムアンドサービス.
- ・『デジタル大辞泉』(2009). 小学館, 東京.
- ・『明鏡国語辞典』(2002 - 6). 大修館, 東京.
- ・『漢字源』(2000). 学研, 東京.
- ・『ジーニアス英和大辞典』(2001 - 4). 大修館, 東京.
- ・『プログレシブ和英中辞典』(2002). 小学館, 東京.
- ・『英和活用大辞典』(2006). 研究社, 東京.
- ・池上嘉彦(1983)『意味論』大修館. 東京.
- ・池上嘉彦(2000)『日本語論への招待』講談社. 東京.
- ・上野義和編(2006)『英語教師のための効果的語彙指導法 — 認知的アプローチ —』英宝社. 東京.
- ・寺澤芳雄編(1997)『英語語源辞典』研究社. 東京.
- ・*My Darling Clementine* (米. 1946年. 20世紀FOX) (日本題名『荒野の決闘』) DVD : PDM - 042 ©2005 KEEP Co., LTD.
- ・*Oxford Advanced Learner's Dictionary* (2005). Oxford University Press. UK.
- ・Lakoff, G. & M. Johnson (1980) *Metaphors We Live By*. University of Chicago Press.
- ・Lakoff, G. & M. Johnson (1999) *Philosophy in the Flesh — The Embodiment Mind and its Challenge to Western Thought* —. Basic Books. New York.
- ・Lakoff, G. & M. Turner (1989) *More than Cool Reason: A Field Guide to Poetic Metaphor*. University of Chicago Press.
- ・Sweetser, Eve E. (1990) *From Etymology to Pragmatics: Metaphorical and Cultural Aspects of Semantic Structure*. Cambridge University Press. UK.